
エンドレス

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス

【Nコード】

N8832H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

それは男の日常から始まる話である。永遠に続くはずもなく、少しずつ変わりつつある日常。その答えが読めばREADING

第一話

その男はいつも通りなじみのコーヒーショップへ入っていった。

「いらつしやいませ」

ドアが開いた瞬間髪の長い女性のウエイトレスが迎えてくれた。

男はいつも通り頭を少し下げいつもの席へと案内された。

「こちらの席でよろしかったでしょうか」

女性のウエイトレスが男に聞いてきた。

男はコクリと頷いた。

「注文はいつものでよろしいでしょうか？」

男はまたもコクリと頷いた。

そして女性のウエイトレスは調理場へ帰っていった。

すると男は持ってきたかばんの中から一冊の本を出して読み始めた。本のタイトルは「春夏秋冬」であった。内容は田舎から都会へ大学合格と共に上京してきた男が、同じマンションで出会った。女性に恋をするという恋愛小説である。

男は真剣に本を読んでいた、そして数分後、さきほど違う髪がショートカットの女性のウエイトレスがコーヒーとハニートーストを運んできた。

「お待たせいたしました。ハニートーストとヒーコーです。」

男はあれっと言う顔をしながらショートカットのウエイトレスの顔を除いていた。

「だから、はちみつパンと黒い飲み物、OK注文はこれで」

男はウエイトレスの迫力に負けてしまいただ、頷くだけであった。

男はコーヒーとハニートーストすり、食べながら考えていた。

いつもの髪の長いウエイトレスさんはどうしたんだ？まさか

何かあったのでは、肉体疲労？元氣一発リポビタンスを渡さなけれ

ば、宇宙人？まさか三分間しか活動できない体？星に帰ったのかな、いやまてよ、今日は早めにバイトが終わったのかもしれないぞ。そう、彼女は家族の誰かが誕生日とかでプレゼントを買いにいくためだ。そうに違いない。

そうだ。そうだ。

男はかつてに決め付けていた。

「そんなはずないだろ、これだよこれ。お、これ美味しいな」

どこからともなくというか、さきほどの髪の毛がショートカットのウェイトレスが男の

ハニートーストをかつてに食べながら親指を男の方に向けていた。

「お、男……男って意味ですか？」

「それ以外これなんに見えるんだ。あつ、ヒーコもらうよ」

「えつ、あ、どうぞつて、もうどこからツツコンでいいのか分からないけどまず、あなた

いったいここで何してるんですか。ここの従業員でしよう？つていうか仕事中でしよう？」

つていうか何勝手に食べているんですか？」

髪の毛の短いウェイトレスがコーヒーを飲み干してから話した。

「あ、ウェイトレスさん、ヒーコおかわり」

「つてあんたがウェイトレスでしよう？」

「うん、あつそっか、そうだった。忘れていた。さっきまで働いていたんだ」

「いや、今も働いているでしょう。自分の格好を見てくださいよ、えつとかれんさん」

男は髪の毛の短い女性の胸についているバッチを見ながら言った。

「な、なぜ僕の名前を、まさか君は予知能力者？じゃあ、じゃあさ口ト6の番号教えて、そして僕はお金持ち、ラララーお金持ち、働かなくていいー、これいいよね、うんいいよね、で番号は」

「で、番号と言われても、自分予知能力者ではありませんし、名前が分かったのは胸のバッチを見たから分かったんですよ。だから口

ト6なんてわかりませ」

男が言い終わる瞬間であった。かれんのビンタが男に炸裂した。

「え、H」

「はぁ？」

男はぼうぜんとしていた。えっ、何俺がいったい何をしたの？頭の
中が真っ白になっていたが、頬がじんじんと赤く腫れていた。

その時であった。

「す、すみません」

この声は、男はすぐに声が聞こえた方を見た。するとどうだろう神
々しい、まさに百万ドルの笑顔
にふさわしい。そう、あの髪の長いウエイトレスの人が目の前にい
た。

「あー、サクラー聞いてよ。このH男がー、あ、いたいよ」

髪の長いウエイトレス、サクラはかれんの耳を引つ張っていた。

「見てたわよ、っていうか聞こえていたわよ。あんなに大きな声で
しゃべっていたら、聞こえるにきまつてるでしょう。しかもまだ仕
事中でしょう。ほら、あそこ見て」

サクラが厨房の方を指差していた。

サクラの指の先には、鬼のような顔、まさに閻魔といっても過言
ではないだろう、店長らしき人がフライパンを持ちながらこちらに
手招きしていた。

「あ、わわわわあわわわ」

先ほどまで、元気な顔をしていた。かれんがまるで世にも恐ろしい
ものにあつたかのような顔をしていた。しかし男が見ているのに気
づく。

「やばい、こいつはあーヘビーだね。とつつあん」

本人は余裕があるよと思わしたかったのだろうが、声が震えていた。
「じゃ、じゃあ、私はいつてくるよ、F A R W A Y、楽園を探し
にね。サクラー一緒に来て、おねがいー」

なみだ目になりながら、そしてかわい小動物みたいな雰囲気を出

しながらサクラを見つめていた。

「うーん、仕方がないな。一緒にいつてあげるからちゃんとえーと」
サクラが男の方をちらりと見た。男はこのタイミングを逃さなかった。

「保幸、幸せを保つと言う意味で保幸、佐方保幸です。保幸と呼んでください」

男は人生の中でこれほど自分を出したことはなかった。

男はあれ、何言ってるんだ俺と思っていた。

「えーと、それじゃあ保幸さん、先ほどはかれんが本当に迷惑をかけてすいませんでした」

ふかぶかとサクラは頭を下げていた。

「悪かったね、保幸」

かりんはフンという顔をしていたがサクラに頭を手で下げられていた

「ほら、かりん」

「うー、ごめん」

これがかりんの精一杯の誤りであろう。しかし男はそんなことは眼中になかった。

サクラさんに名前を呼ばれた。呼ばれた、やったよ。もう俺死んでもいいかも。

お母さん、お父さん保幸とつけてくれてありがとう。

「あの、保幸さん」

サクラの呼び声が僕の妄想ワールドから現実世界へと呼び戻した。

「あつ、はい、はい保幸です」

「すいません、それでは私たち、店長の所にいつてきます」

サクラは鬼の形相をしている店長の方をチラッとむいた。

「え、あ、どうぞ、どうぞ、わかりました」

保幸もちらつと、店長の方を見たがフライパンが燃え上がっていた。保幸は思った。人間じゃねえと。

「あ、あとこの後、もしよろしければおわびにお茶でもごちそうさ

せてください」

「え、あつはい。待ってます。ここで待ってます。」

「では、後ほど」

サクラはご丁寧に頭をさげ店長の元に戻っていった。

保幸は何がなんだか分からないまま返事をした。

え、あ、これはもしかして、もしかしますと、お誘いですか？

即座に保幸は友達に電話をした。

「お、斉藤君、実はね、かくかくしかしかというわけなんだ」

「なんだって、かくかくしかしかだと。意味わかんねえよ」

「僕もそう思うよ。これを通じたら漫画の世界だよ」

「ははは、で、保幸、サクラちゃんとデートかい？」

「って、なんで知っているの斉藤君」

「え、まじ、今サクラ。戦をやっていて、ヒロインの名前を言ってみただけだよ。つておめえまじで、サクラちゃんって誰だよ。三次元なのか？えっ今日は、エイプリルフルだったけ？」

斉藤君は驚いていた。あと、ム力ついていた。腹の中は煮えたぎっていた。

「いや、本当だよ」

「じゃあ、おまえ誓えるかい、2次元萌神に」

「ああ、誓えるさ、2次元萌神に」

「………本当なんだな。わかった。保幸に全面協力しよう。我が二次元萌神隊が。」

すべての情報網を集め、保幸に叩き込んでやる。」

「あ、ありがとう。斉藤君」

「ノンノンノン、私の事はSAITO、S A I T Oと呼んでくれたまえ」

「意味分かんないけど、わかったよ。SAITO君」

「で、さっそくなんだけど、いいかな」

「ああ、………ちよつとまってくれ、今からトランプキャスタ

ISAKURAが始まるではないか、これは見なくては二次元萌神

隊の名が泣く。では保幸そういうわけだ、じゃあな」

いい終わった瞬間携帯電話を切られた。

「もしもし、全面協力するんじゃないのかよ、え、おい。もしもし、まじ、それで終わり」

保幸はぼーぜんとしていた。しかしその間にも、時がコチコチと進んでいった。

「やばい、時間が、進んでいく、こういうときは、ザ、ワールド時よ止まれ」

保幸は小さな声で、言ってみた。

しかし、何もおきなかった。当たり前だが。保幸は少し照れていた。「まあ、分かったけどね」

そんなばかなことをしている間に、彼女、そうサクラの姿が見えた。こちらに満面の笑みで手を振っていた。

保幸は、うれしさのあまり失禁しそうになった。

くる、くるきつとくるーーーーー。

頭の中でこの言葉がかけめぐっていた。

僕は、脳に電気が走った。頭の中でハイターン、ダブルターン、トリプルターンとぐるぐると回っていた。

落ち着け、もちつけ、いいから落ち着け、うさぎじゃないんだからと、自分に言い聞かせていた。

しかし、だんだんと彼女が近づいてきた。その距離、20M、衛生兵、衛生兵はおらぬかーーーーー。恋の負傷者が、ここにいますよ。

心の中で保幸が叫んだ瞬間の時のことだ。

へーザ、ワールド、時は我が操る

誰だ、誰なんだ、この声は、僕は心の中で叫んでいた。

へー安心しろ、時は我が止めた

まじですか、ありがとう。誰か知らない人。

時が止まったと僕は思っていたが実際には止まっていなかった。だって、彼女の距離が13Mと普通に近づいていたからね。

誰か知らないが、お前、何がザ、ワールド、時は我が操るだ。操れていねえよ。

心の中で思った。

ふふ、それはそうさ、驚はお前によって作られた、者だからな、じやあ、あとががんばれ

そういうなり、声が聞こえなくなっていた。

え、何、役にたたねえな。

ふうるせえ、死ね

な、なんてことを言うんだ。俺が作った幻影なのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8832h/>

エンドレス

2010年10月10日03時35分発行